

1 黒毛和種牛（但馬牛）の新しい飼育管理技術

はじめに

ここ数年、本県の和牛生産は農家戸数及び飼養頭数ともに減少傾向にあるが、経営規模の拡大は着実に進んでいる。しかし、規模の拡大により労働力、飼育管理技術の面で適切な対応ができず、繁殖性の低下や子牛の育成が不十分であるなど多くの問題が生じている。そこで、健全な和牛経営を育成するため、最近、新しく開発された飼育管理技術を紹介する。

1 ホルモン製剤を活用した定時授精

近年、ホルモン製剤を使って排卵を同期化し、定時に人工授精を行う技術が開発されている。この技術は農家が雌牛の発情を確認することなく、ホルモン製剤によって排卵をコントロールし、定時に授精を行うことができる。しかし、従来から行われている定時受精法(オブシンク法)では受胎率が低く普及性に欠けるため、このオブシンク法にプロジェステロン放出腔内挿入製剤(CIDR)を併用した新しい技術を開発した。この技術は人工授精における大幅な受胎率の向上が見込まれるほか受精卵移植の受胎率を高める技術としても大きく期待されている。

2 超早期母子分離による哺育育成

和牛の子牛は通常、生後4～6か月間母牛につけて母乳で育てられているが、生後、初乳を飲ませて1～6日間で母牛と分離し、代用乳と人工乳で育成する超早期母子分離技術を確立した。この方法で子牛を育成すると下痢等の疾病が少なく、子牛を良好に発育させることができる。また、母牛は母乳を出さずに済むことから、損耗が少なく発情回帰が早くなるため1年1産が可能になり、生産効率が向上する。最近、乳用牛で利用されている自動哺乳装置(哺乳ロボット)を活用した省力的で多頭飼育に対応できる技術を開発し、現在普及しつつある。

3 粗飼料多給による子牛の育成

和牛の子牛は生後約8か月間育成して家畜市場で

販売されているが、子牛の市場評価は主に出荷時の体重で行われる傾向にある。そのため、多くの農家では栄養価の高い濃厚飼料を多給することにより過肥気味の子牛が育成されている。過肥の子牛は肥育素牛として肥育効率が悪く、また、繁殖牛としても繁殖障害になりやすいと言われている。そこで、子牛を適正に育成するための給与法を検討し、粗飼料多給で育成した子牛は濃厚飼料多給に比べて肥育効率が高いことを実証した。

今後、粗飼料多給で育成した子牛が市場で高く評価されるように技術普及を進める。

4 和牛飼育と山間地域の活性化に効果的な放牧

最近、但馬地域を中心に入会い林野や耕作放棄地などを活用して和牛の放牧が行われるようになってきた。和牛の放牧は低コストで省力的な飼育管理ができるうえ、耕作放棄地の管理や牧歌的な景観形成など多様な効果が期待できる。しかし、放牧を行うためには地域の合意形成や草地造成、牧柵等の設置、放牧牛の疾病対策など多くの課題に対応しなければならない。

今後、これらに対応した新しい技術を開発し、更に放牧を普及させることにより、安定した和牛経営を育成するとともに荒廃する山間地の保全など地域の活性化を図ることとしている。

おわりに

今回紹介した新しい技術の普及により、和牛経営の安定化が図られ、農家戸数や飼育頭数の増加につながればと考えている。和牛の飼育管理には多くの熟練した技術が必要であり、高齢化や飼育規模の拡大が進むなかで、生産現場では技術的な課題が山積している。今後とも、これらの課題を解決するための試験研究に取り組み、本県和牛の振興に貢献していきたい。

上野 悟（北部農技・畜産部）